

令和3年度活動報告

<近現代の曹洞宗教団と布教教化研究会>

1、昨年度来、本研究会では（1）明治期の宗門僧侶養成・教育制度、（2）日清・日露戦争下における宗門の動向について、それぞれ再検証しておりますが、その作業中、必ず『修証義』の存在が浮かび上がってきました。

（1）については、廃仏毀釈以降の宗門内外はめまぐるしく変化したため、宗門内の近世からの布教方針、僧侶養成、そして宗旨・教学確立の面で混乱をもたらしました。その混乱の歯止めとなるべく、『修証義』編纂が開始されたと考えられます。

（2）については、日清・日露戦争下に発行されていた『明教新誌』『仏教界』『新仏教』等の仏教系論説誌、そして国策との関連の深くなる明治中期以降に出された仏教系出版物は夥しい数に上ります。それらを一つ一つ見ると、「曹洞宗がどのように戦争を把握していたのか」が見えてくると同時に、他国との戦乱の中で、いかに『修証義』の教えが「変容」していったかを考えざるを得なくなります。

2、かつて平成13年（2001）3月発行の曹洞宗ブックレット 宗教と差別12 曹洞宗人権擁護推進本部編『『修証義』について考える 「旃陀羅・修証義」に関する専門部会中間報告』（以下ブックレットと略）において、『修証義』及び注釈書への言及は、既になされています。

とはいえ、ブックレット発行から現在まで、「本報告」への追加研究がなされたかと考えた時、ブックレット理解のための学習会は開催されたものの、本格的な『修証義』及び注釈書の位置づけに関する議論の場があったか否かは、定かではありません。

ブックレット内「四、暫定的なまとめ」（57～59頁）において、暫定的結論と共に、今後に向けての問題提起がなされています。その内の一つ『『修証義』の思想・論理・文脈が構造的・潜在的に持つ志向』について、本研究会は研究作業を進めております。

3、大内青巒（1845～1918）が『修証義』編纂に大きく関与したことは、宗門では周知の通りですが、その大内師編集・発行である二誌（紙）、即ち『明教新誌』（通宗派的仏教新聞。明治8年（1875）創刊、明治34年（1901）終刊）と『扶宗会雑誌』（明治20年（1887）に大内師が設立した扶宗会の機関誌）を本年度研究テキストとしました。

『明教新誌』の具体的な資料研究分析を行うことにより、冒頭に『官報』への言及をした上で、「各宗派の教育（布教教化も含む）についての言及」が同誌の柱の一つである規則性が判明しています。

上記の如く同誌は僧侶養成・民衆布教の強化を説き続けながら、他宗布教活動（特にキリスト教）、欧米列強への対抗心や不平等条約への言及もしています。その対外的・対抗的思考が、後の説教書・解釈本に見られる日本武士道・義勇奉公称賛、国体のための禅精神、「日本に生まれた喜び」の強調と連繋したのではないかと考えています。

これらを踏まえた上で、『明教新誌』内の曹洞宗関連記事を読むと、宗門の僧侶養成・民衆布教及び『修証義』が議題となった第三次宗議会（明治23年〈1890〉10月8日～11月28日）の内容検証が目を引きます。同時に『明教新誌』には『修証義』の内容に関する記事も多いため、同誌が並々ならぬ『修証義』への興味を有していた事が分かります。

その全貌を明らかにするべく、『修証義』編纂と深く関わる『扶宗会雑誌』との内容比較、特に四大綱領に関する記事内容の比較も開始しました。両誌（紙）の編集発行に大内師が関連していることを鑑みても、大いに研究すべき課題ではないでしょうか。

4、『明教新誌』は注釈書にまで言及しています。例えば『修証義』の代表的注釈書『曹洞教会修証義筌蹄』（明治26年〈1893〉、鴻盟社）の広告を掲載し、曹洞宗教育機関にて『修証義』は「教科書」として使用され、『筌蹄』はその参考書と明記されています。

そうすると、ブックレットに掲載された多くの『修証義』注釈書も同様である可能性を視野に入れるべきでしょう。本研究会ではブックレットをベースにしつつ、注釈書の再読・再検討を来年度以降行う予定です。